



身近な自然の観察・記録活動 石神井川緑道版

2021.1.14

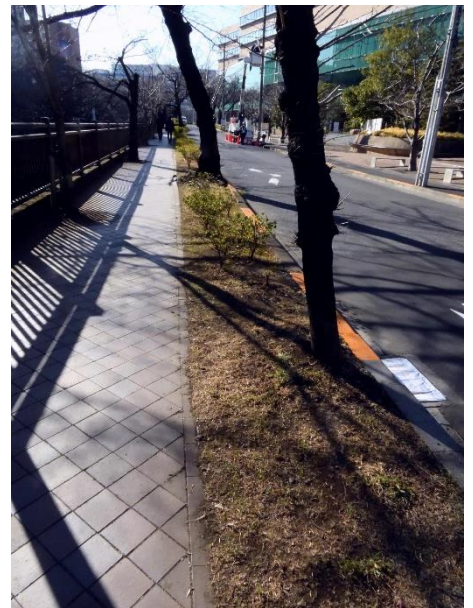
一人ひとりの自主活動 だれでも参加できます

活動：月2回(第二木曜日・第四金曜日)10:00より(雨天中止)
コース：帝京大学付属病院北詰・御成橋たもと→金沢橋
問合せ・連絡先：090-8646-9757 木村松夫 com-matchan@hotmail

街路樹の下のみどいは安らぎ



何年も前からダラダラと続けられてきた帝京大学病院北側の道路拡幅工事がやっと終わりました。左の写真がそれですが、真ん中から右側のもともとあった歩道は観察・記録活動の対象エリアなので、ここの街路樹と下草も取り払われてしまうのではないかと心配だったのですが、それはそのまま。2本の歩道が並行して伸びる珍しい風景になりました。

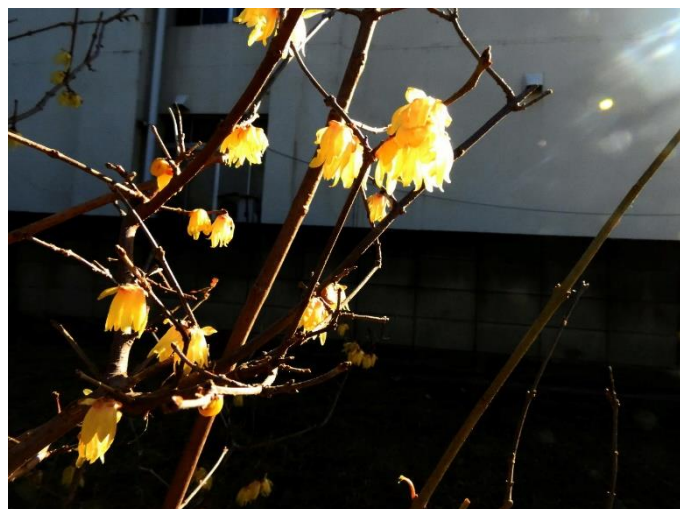
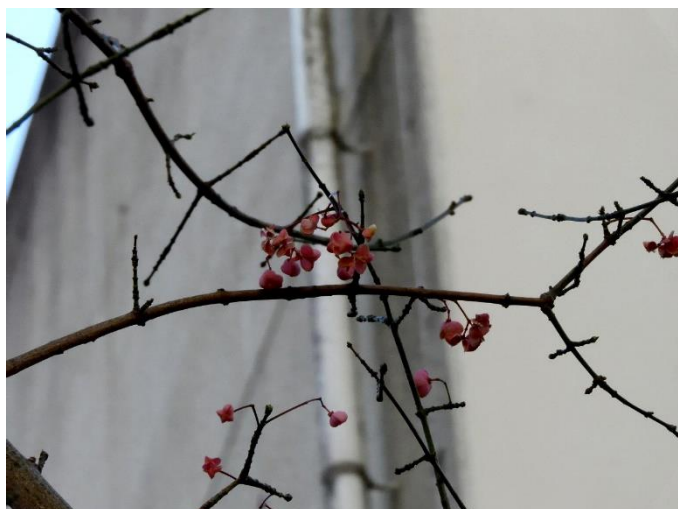


南側に建つ病院の陰になって午前中は日が当たらないこんな場所でも、年間を通して100近くの植物が開花するのです。1/14の真冬の観察活動でも**ノゲシ**(下の写真左)や**ハキダメギク**、**アメリカヌハウズキ**(下の写真中)が咲いていました。この数年は厄介者として扱われている**ナガミヒナゲシ**のロゼット(下の写真右)も観られるようになりました。他方、病院西側の石神井川沿いの桜並木の遊歩道(上の写真右)は、日はよく当たるのに、年に数回も徹底した草刈りが行われるので、今の季節は草も生えない露地むき出しのカサカサ枯野状態。

植栽された樹木以外に“**はびこっている**植物”は「雑草」と決めつけて「退治しろ」という考え方が“**はびこっている**”し、反対に「そのままにしろ」と言っても生物多様性に悪影響を与える植物もあるので、どちらが良いかは一概には断言できません。でも、殺風景な冬の街路に少しでも景観を彩る野草が生きていることは大いなる安らぎになっていると、わたしは思うのです。



真冬の観察活動 咲いている花が少ないので早く終わる。 でも、見るべきもの、考えるべきことはたくさんあり！



石神井川緑道が整備されたのは1970年代から80年代だと思いますが、当時植栽された植物がまだ生き残っています。しかし、何十年も経つと最初の設計・管理思想などは忘れ去られてしまって、ただそこにあるというだけの植物になっているものがあります。

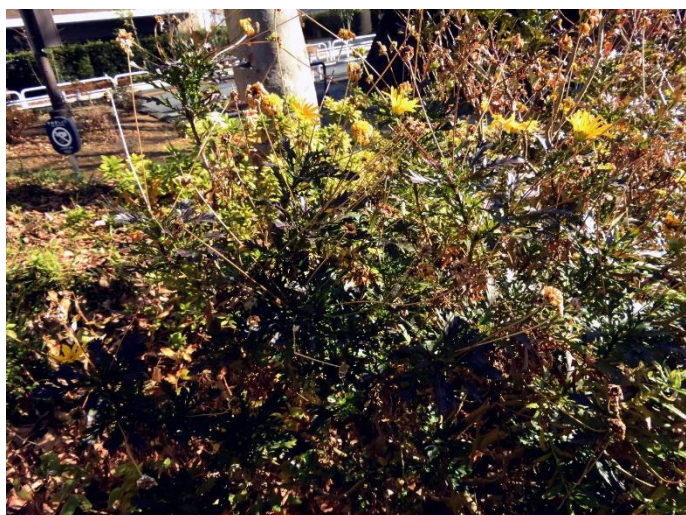
美しい実をつけるマユミ（上の写真左）は本来ならばより適した環境下できちんと管理されていても良いはずなのですが、ほとんど放置状態。2019年秋に初めて果実を観察して、ようやく同定が出来たのですが、今年も誰にも気づかれずにひっそりと実を垂らしていました。

ロウバイ（上の写真右）は、加賀第二公園のトイレの傍（かたわら）の、だれも近づきたくないところで、しかも毎年強剪定されるので、縮こまりながら咲いていました。

「放射冷却」現象と霜枯れ

右の写真はユーリオプスデイジーというキク科の園芸植物。公園整備当時は花壇だった一角で、今はあたかも勝手に生えている野草のように伸び放題になっています。秋の花ですから真冬の今頃はもう花は枯れていて当然なのですが、葉も先端部分が霜枯れています。葉が密集している下の方は緑色のままです。

冬の良く晴れた日は太陽の熱で地表が温められますが、朝には夜の間に冷やされた空気が上空から降下してきます。地表の暖かい空気はそ



れと入れ替わるように上昇して、地表近くの気温は低下します。これを「放射冷却」というのですが、このユーリオプスデイジーの葉は、上の方は冷たい空気に触れて枯れ気味となり、下の方の空気は葉の茂みによって放射しないので、緑を残しているというわけです。

注意して観察すると、地際に生えている小さな草にも同様の現象が起きています。だとすると、野原の野草は冬季には冷却防止効果もあるということ。面白いものです。

※2月までの石神井川観察は1/22、2/11、2/26の予定。コロナ蔓延中、無理なくやります。